第2章　インド・ヨーロッパ圏とのつながり

これまで考察してきたように、グリム兄弟はドイツ (ゲルマン語族) の神話や古い文学と昔話の間につながりを見出し、具体的に指摘している。『パルチヴァール』の項でも言及したように、グリム兄弟は雪の白と血の赤と黒という色に着目し、さまざまな地域の文献にそれが現れていることを指摘する際にインド神話をも含めていた。つまり彼らは、このつながりの範囲を、ドイツ (ゲルマン語族) 内のみに限定していたわけではなかったのである。

グリム兄弟がこうした捉え方をしているのには、当時の学問の思潮が深くかかわっている。すなわち彼らは、まさに印欧語研究が活発になり始める時期を生きたのだった。

イギリスのジョーンズがインドのカルカッタで「インド人について」の講演を行い、古代インドのサンスクリット語とギリシア語、ラテン語古語の類似を指摘し、これらが共通の源から発したという推論を発表したのは、弟ヴィルヘルムが誕生した年にあたる 1786 年であった。

1816 年にはドイツのボップ (Franz Bopp, 1791-1867 年)[1]が『ギリシア、ラテン、ペルシア、ゲルマン諸語のそれとの比較による、サンスクリットの動詞活用組織について』を発表、1818 年にはデンマークのラスク (Rasmus Kristian Rask, 1787-1832 年)[2]が『古代北欧語、すなわちアイスランド語の起源に関する研究』を刊行 (執筆は 1814 年) している。ラスクは、後に「グリムの法則」と呼ばれるようになるゲルマン語の音韻推移を、グリム兄弟に先んじて指摘し、インド・ヨーロッパ語とゲルマン諸語との親縁関係を証明したのであった。しかしそれがデンマーク語で記されていたため、北欧以外にはあまり広まらなかった (風間 1989 S. 75ff.)。

グリム兄弟の仕事がこういう思潮の流れの中に置かれていたことは言うまでもない。「グリムの法則」を定式化したのはヤーコプだが、ヤーコプは、ラスクの上掲書に触発され、1819 年に刊行していた『ドイツ文法』の第 1 巻を改訂し、3 年後の 1822 年にその改訂版を出すなどして、積極的にこの議論にかかわっていたのである。

グリム兄弟が、ドイツ語をインド・ヨーロッパ語族というつながりの中で捉えていたことは、『ドイツ語辞典』の序文に次のように記されている[3]。

---

[1] デンマークの R .K. ラスクとともに、印欧語比較言語学の創設者と言われる言語学者。ベルリン大学に迎えられ、世界で初めて比較文法の講義を持った。その後、印欧諸語の『比較文法』全 3 巻 (1833-52 年) を始めとして多くの研究を発表した。

[2] 言語学者、コペンハーゲン大学の東洋語教授も勤めた。約 50 ヵ国語を修め、諸国語の文法書を編纂した。

[3] その他、ヤーコプの『ドイツ語史』の「結論」部にも次のような記述がある。「私の研究の成果なのだが、私たち**ゲルマンの言語**は、まずは血縁的にスラヴ語とリトアニア語の仲間である。そして少し距離をおいてギリシア語とラテン語の仲間である。[...] さらに遠いがケルト語との親縁関係も明らかである。しかしフィンランド語とは遠く離れており、実際に親縁関係はない」(J. Grimm 1848 S. 1030)。引用文中の「ゲルマンの言語」というのは、原文では deutsch である。ヤーコプの『**ドイツ**文法』(**Deutsche** Grammatik) においても「ドイツ」という語が**ゲルマン**語という意味で用いられているのと同様、ここでもゲルマン語全般を指している。グリムの deutsch という語の用い方に関しては、風間 1985 S. 125f. に詳しい。またヤーコプは、deutsch という言葉が、古高ドイツ語で Volk に相当する diet から派生したと考えていたため、彼が

> ドイツ語は、ヨーロッパのほとんどの言語を結びつけている鎖につながれている。遡っていけば、その鎖はアジアまで、さらにはサンスクリット語までつながっているのである (J. Grimm 1965a Bd. 8 S. 354)。

伝承間のつながりに関しても、グリム兄弟は同様の枠で考えていたことが、『昔話集 注釈篇』(第 3 巻) に記されている。

> 一体、昔話が共通しているところの境界線の外側はどこに始まっており、この親縁関係はどのように段階づけられるのだろうか。この境界線は、**インド・ゲルマン**と呼ばれている大きな部族によって引かれている。そしてこの親縁関係は、ゲルマン人の居住地のまわりで、より小さい輪に収束している。これは言語においても、この部族に属する民族のおのおのの言語に、共通のものと独自のものを見出すが、この関係とだいたい同じである (Grimm 1994 Bd. 3 S. 423)。

さらに、ヴィルヘルムによる『昔話集』第 2 版の前書き[1]には、次のような言葉がある。

> とりわけ目を引くのは、セルビアの昔話との一致である。これらの話をセルビア人がヘッセンの人里はなれた村まで運んできたとは、誰も考えないだろう。その逆も同様に考えられない。さらには、個々の筋や言い回しまでも、東方の国々、ペルシア、インドの昔話と一致しているのである。これら全ての民族には親縁関係があり、それはラスクが最近明解に証明したとおりである。[...] こうした関係は、諸民族が分離する以前に共通の時代があったことを暗示している。その根源を探ろうとしても、それはいつも遠ざかってしまい、探求不可能な神秘的なものとして暗闇の中に潜んだままなのである (W. Grimm 1992 Bd. 1 S. 337f.)。

グリム兄弟は、伝承に関しても言語と同様の共通の源を想定していた。そのため、『昔話集 注釈篇』においても、ゲルマン語族のものに留まらず、インド・ヨーロッパの範囲内で、共通の源を想定した言及がなされているのである[2]。まずは、ヨーロッパの境界に位置づけられるギリシアとのつながりから考察していく。

---

deutsch を用いる場合には「民衆の、民族の」というニュアンスも含まれている (Denecke 1971 S. 121)。

[1] 『昔話集』第 2 版には、まず序文 (Vorrede, S. V-XX) が、その次に前書き (Einleitung, S. XXI-LIV) が置かれていた。

[2] 『神話学』にも同様の立場からの言及がなされている。例えば第 2 版の序文では、ゲルマンの古代とインド神話には、源が共通であるために一致が見られるとして、ブラフマーをヴォーダンと、インドラをドナーと並べている (J. Grimm 1992 Bd. 1 S. XXVf.)

第1節　古代ギリシア

1. ギリシア神話

古代ギリシアの神話を伝えているものには、ホメロスの叙事詩『イーリアス』や『オデュッセイア』(前8世紀中頃) があるが、グリム兄弟はこの『オデュッセイア』とある昔話の関連を、注釈の中で指摘している。

> 不幸な者が灰の中に座るのは**古いしきたり**だった。オデュッセウスも、よそ者としてアルキノオスに助けを求めて語りかけた時、謙虚に炉の灰の中に腰を下ろす。そしてその後、上へと促される[1](Grimm 1994 Bd. 3 S. 50)。

このように、灰の中に腰を下ろすオデュッセウスと関連づけられたのは、「灰かぶり」(KHM 021, シンデレラ) なのである。継姉らにいじめられ、夜はベッドではなく、かまどの脇の灰の中で寝なければならない、あの灰かぶりである[2]。このように、不幸な境遇にある者が灰の中に座るのを甘んじなくてはならないところに、グリム兄弟は何らかの関連があると考えたのである。

では、ホメロスの『オデュッセイア』の該当する部分を見てみよう。

オデュッセウスは、ポセイダオンに筏を破壊され、なんとか辿り着いた島でナウシカアに出会う。以下に引用するのは、身ひとつになったオデュッセウスが、彼女の父親であるアルキノオス王のもとに赴き、帰郷の助けを求めて王妃アレテに語りかける場面 (「第七歌」) である。

> 「[...] ところでお願いいたしたいのは、できる限り早くわたくしが故国へ帰れるよう、お計らいいただきたいということ、この幾年、身内の者たちから離れてさんざんに苦難を嘗めてきたものですから。」
>
> こういうと、**炉の火の傍らの灰の中へ坐り込んだ。**一座はしんと静まり返ったが、ややあってようやく老雄エケネオスが口を切った。パイエケス人の中では最長老で故事に通じ、弁舌も他にぬきんでていたが、一同に向かい善意を籠めていうには、
>
> 「アルキノオス王よ、異国からの客人をこのように床の上、それも炉の灰の中に坐らせておくのは宜しからず、また礼にも背きましょう。(後略)」
>
> 天与の力に恵まれたアルキノオスはその言葉を聞くや、機略縦横の智将オデュッセウスの手をとって炉辺から立ち上がらせ、自分の側に坐っていた特に寵愛の倅、凛々しいラオダマスを立たせて、**その美しい椅子にオデュッセウスを坐らせた**」(ホメロス 1996 上巻 (松平訳) S. 177f.)。

こうしたグリム兄弟による結びつけ方は、時として恣意的に見える場合があり、それを

---

[1] オデュッセウスは、椅子に座るよう促されているのである。

[2] グリムの「灰かぶり」やペローの「サンドリヨン」は女性であるが、類話で男性版の話があることは、すでに前章第3節で指摘した通りである。そのため、ここでは男のオデュッセウスと女の灰かぶりが何のためらいもなく結びつけられているのである。

A. W. シュレーゲルが批判していたことは、既に言及した通りである (前章第 2 節)。しかしグリム兄弟は、「古いしきたり」を介して、両者が関連している可能性を示唆しているのである。

その他「焼かれて若くなった男」(KHM 147) には、次のような注釈が付けられている。

> 年寄りの男が若返り、そしてその模倣が失敗するのは、まさにギリシアのメディアとアイソンとペリアスの神話物語を想起させる (Grimm 1994 Bd. 3 S. 243f.)。

「焼かれて若くなった男」(KHM 147) は、そもそもハンス・ザックス (前章第 3 節参照) から採用した話であった。グリムの話では、神と聖ペテロが鍛冶屋に立ち寄り、かわいそうな乞食の爺さんを、自力で稼ぐことが出来るように若返らせようとするのである。ふたりが炉に火を起こし、爺さんを火の中に入れ、続いて水で冷やすと、男は 20 歳前後の青年に若返る。それを見た鍛冶屋は、模倣して姑を若返らせようとするのだが、失敗するという話だ。

一方、若返りの術を心得ていたメディアについては、オウィディウス (前 43-後 17 年) の『変身物語』(後 8 年以前)[1]などに記述がある。

メディアは、イアソンに頼まれて、彼の父親アイソンを若返らせるのである。

> メディアは、それを目にすると、剣の鞘をはらって、老人の喉を切り開いた。古い血を流れ出させて、かわりに、開かれた血管を薬汁で満たす。アイソンがそれを、口から、あるいは傷口から飲みこむと、ひげと髪が白さを失って、たちまち真っ黒に変わった。やせ衰えていたのが、まるでうそのように、青ざめた色も、老醜も消える。凹んだしわは、新たについた肉でうずめられる。手足には、活気がみなぎる。アイソンは、われながら驚き、むかし四十年前の自分がこのようだったことを思い出す (オウィディウス 2000 上巻 (中村訳) S. 273)。

この後、メディアはペリアスの館へ赴く。メディアは、老齢の羊を若返らせることで、ペリアスの娘たちに薬の力を示す。娘たちは、父親を若返らせるようにメディアに要請するが、「不実なメディアは、清水と、何の効き目もない草とを、強い火にかけ」、彼らを欺くのである (オウィディウス 2000 上巻 S. 275f.参照)。

このように「若返りの術」、その後の「失敗」(メディアの場合には意図的な失敗であるが) という点で、グリム兄弟は両者の話を関連づけたのである。

2. ギリシアの寓話

次に『イソップ物語』をイアンボス詩形に改作した『バブリオスによるイアンボス詩形のイソップ風寓話集』に着目したい。バブリオスはギリシアの寓話詩人で、生没年、伝記は不詳である。おそらくギリシア化したローマ人で、2 世紀ごろの人と推定されている (EM

[1] オウィディウスはローマ人ではあるが、『転身物語』はおおむねギリシア神話の焼き直しである。

Bd. 1 S. 1123ff.)。

さて、グリム兄弟は「寿命」(KHM 176) の注釈にてこう指摘している。

> 注目すべきことに、バブリオスにもこの話がある。少し相違点もある (Grimm 1994 Bd. 3 S. 260)。

グリムの話はこうである。神が全ての生き物の寿命を決める際、おのおのに30年を与えようとする。ろば、犬、猿は自分たちの生きる上での苦労を訴え、減免を願い出る。そして、それぞれが18年、12年、10年分短縮される。最後に人間が来て、30年では短すぎるという不服を申し立てたため、他の動物が辞退した分が加算される。それで、人間の寿命は70年になったが、人間らしい生活を謳歌することが出来るのは最初の30年だけで、次はろばのように他の人を養う食料を背負わなくてはならない18年、その次に犬のように隅にころがってうなる12年、最後には猿のように頭がぼけておろかになり、ばかげたことをする10年がくるという話である。

グリム兄弟がバブリオスの中にもあるとした話は「ウマとウシとイヌと人」である。

> ウマとウシとイヌが寒さにあえぎながら、ある人の家にやって来ました。男は彼らのために戸を開け、なかに招き入れてやりました。そして火をかんかんに起こして炉端で暖めてやった後、手元にあった食べ物を供しました。ウマには大麦の粒を、働き者のウシには豆をふるまいました。イヌは食卓のわきに立って、お相伴にあずかりました。
>
> 手厚く持てなしてもらったお礼に、彼らは自分自身の寿命の一部を割いて男にお返しをしました。
>
> いち早く与えたのはウマでした。そういうわけで、若い頃には人間だれしも考えが奢り高ぶっているのです。ウマに続いたのはウシです。そういうわけで、人は中年に達すると、骨身を惜しまず仕事熱心で、富を集めるのです。
>
> 晩年の歳月を与えたのはイヌでした。
>
> なあブランコス、だから年寄りという年寄りはみな、気難しいのじゃ。おまけに、食い物をくれる者にだけしっぽを振って媚び、四六時中がみがみと口うるさく吠え、見も知らぬひとびとを喜ばぬのじゃ (バブリオス／パエドルス 1998 (岩谷他訳) S. 236f.)[1]。

グリム兄弟は注釈の中で、バブリオスの話と「寿命」(KHM 176) を比較して、自分たちが入手した昔話の方が内容に連関性があり、寿命を譲渡する際の動機づけもより自然である、と評している (Grimm 1994 Bd. 3 S. 260)。

このことに関しては、ヴィルヘルムの「バブリオスの一つの短い動物寓話について」という論文においても詳しく論じられている (W. Grimm 1992 Bd. 4 S. 395ff.)。それによれば、バブリオスの話では、親切にもてなしてくれたお礼として寿命を分けているのだが、これ

[1] Uther 1990 にもドイツ語訳が収録されている。

はお礼の対象となる行為とのバランスがとれていない、お礼が大きすぎるというのだ。またバブリオスでは、動物たちが長い寿命に満足していない理由が語られていないことにも着目している。このふたつの理由から、バブリオスの話の方が、源の話からより退化しているように見える、と判断している。そのため、ドイツの昔話（「寿命」）は、バブリオスの話に直接由来するのではなく、どちらの話も古い源から別個に発展（退化）してきたものだと、ヴィルヘルムは主張している（W. Grimm 1992 Bd. 4 S. 395ff.)。

第2節　インド

1.　『ラーマーヤナ』

インドとのつながりは、例えば「金の山の王様」(KHM 092) の注釈に示唆されている。

> 羊飼いの格好をして気付かれずに（町の）中へ入ること、そしてマントをまとって姿が見えなくなり蝿の姿になる（ロキが姿を変えるのと同様。**インドのハヌーマン**も**同様にしてシーターのところへ行く**）ところにはより明確に、「姿を消すという隠れ蓑の力」と「北欧伝承での、姿を変えること」が現れている（Grimm 1994 Bd. 3 S. 181)。

この昔話に登場する、羽織ると蝿に姿を変えることが出来るマントを、グリム兄弟が『ニーベルンゲンの歌』の隠れ蓑と関連づけていたことは、既に前章第2節で指摘した通りであるが、ここで注目するのは、「インドのハヌーマンも同様にしてシーターのところへ行く」という箇所である。ハヌーマンというのは、インドの『ラーマーヤナ』に登場する人物である。このようにグリム兄弟は、北欧神話のロキに並べてインドのものを指摘する。

『ラーマーヤナ』は、詩聖ヴァールミーキの作と伝えられている古代インドの大叙事詩で、現存の形となったのは、3世紀頃と推定されている[1]。

グリム兄弟の注釈の指摘にあるシーターは、主人公ラーマの妃である。ラーマは、継母カイケーイーの策略により王位を追われ、シーターとともにダンダカの森で14年の流浪生活を送る。その時シーターは羅刹（らせつ）王ラーヴァナに見初められ、誘拐され、彼の国の首都ランカーに幽閉されてしまう。ラーマはハヌーマン率いる猿の軍隊の援助によりラーヴァナを殺し、シーターを救出しようとする。このハヌーマンは、風神の子で、自由に空を飛行するだけでなく、体躯をも自在に伸縮することが出来るため、シーターの様子を探るべく、海を飛びラーヴァナの宮殿に忍び入る。そこが、グリム兄弟の指摘している箇所なのである（『ラーマーヤナ』第五巻「美の巻」二章　「ランカーの都」)。

> ハヌーマンは途上これらのものを眺め、ついにラーヴァナの守護するランカーに到達した。大いなる都城は、睡蓮にみちた堀割をめぐらされており、シーター掠奪ののちは、ラーヴァナの命をうけた夜警たちが、弓矢をたずさえて四辺を警固していた。
>
> それは、**黄金の城壁**にかこまれ、白色の高楼がそびえ、黄色の大道が通じた、もっとも美しい都城であった。城門はつたにおおわれ、旗幟によって飾られていた。天の

[1] 阿部知二は解説の中で紀元200年頃としている（ヴァールミーキ 1973)。

工匠ヴィシュヴァカルマンが、大いなる努力を払ってこの都を建てたのである。山の洞穴に蛇がたむろするごとく、ここには恐るべき羅刹たちが住んでいるのである。都は山頂に位置し、あたかも天に舞いあがったかのように見えた。ハヌーマンは、インドラ神が讃美をこめて天の上の都アマラーヴァティーを眺めるごとく、驚嘆のうちにこれを見つめた。

勇士はしだいに北門に近づいた。それは天にくちづけするかのように高く、クヴェーラ神の都アラカーの門のごとく見えた。家々は、あたかも天を支えるかのごとく高かった。ハヌーマンは、その強固な防備と恐るべき敵ラーヴァナの猛勇と、そしてランカーをへだてている海洋とを考量して思った。

「たとえ猿軍がランカーに到達することに成功したとしても、彼らはこの都城を征服しえないであろう。神々ですら、戦わずしてこれを占拠することは不可能であろう。まさに難攻不落であり、ラーマもここに渡ってのち、いかにすればいいのであろうか。しかしながら、いまはシーターの生死を確かめるべきである。われは彼女にめぐりあってのち、その後の行動を決するであろう」

彼は山上に坐し、シーターにめぐりあうべき手段を思いめぐらした。

「ランカーは羅刹の兵士らによって防衛されている。どのようにしてそこに入ることができるか。羅刹どもはきわめて強力だから、シーターを見いだすには、彼らをあざむくことが必要である。それゆえ、われは夜を利して、目立たぬ姿で都に入ることにしよう」

やがて太陽は没し、夜が訪れた。**ハヌーマンは体躯を猫ほどに縮小し**、美しいランカーの都へすばやく潜入した (ヴァールミーキ 1973 (阿部訳) S. 250)。

そうしてハヌーマンはシーターの居所を探りだし、彼女に会うことに成功するが、捕らえられてしまう。ハヌーマンはその後、見せしめとして尾に火をつけられ街路を歩かされるが、逆にその火でランカーの町を燃やし、ラーマのもとに帰還するのである。

『ラーマーヤナ』での、目の前に聳え立つ黄金の城、そして猫のように小さくなって侵入するハヌーマンを、「金の山の王様」(KHM 092) での、主人公の男が姿を蝿に変え、金の山の城に侵入するところとグリム兄弟は結びつけたのである。

2. 『シャクンタラー』

次に「12 人の狩人」(KHM 067) の注釈を見てみたい。この話の王子は、婚約者がいるにもかかわらず、父王の臨終の床で父親の望む相手との結婚を承諾してしまうのである。

最初の婚約者を忘れるというのは、多くの話に繰り返し出てくる。(例えば「恋人ローランド」(KHM 056)、「鳴きながら跳ねるひばり」(KHM 088)など)。この話の根底は深い。その重要な例を 2 つだけ挙げておく。**ドゥフシャンタ王はシャクンタラーを忘れ**、シグルズはブリュンヒルドを忘れる (Grimm 1994 Bd. 3 S. 129)。

忘却の杯を飲んだシグルズがブリュンヒルドのことを忘れることは、『ヴォルスンガサガ』からの引用を用いて既に言及した (第 1 章第 1 節 2)。ここでもうひとつの例として上

げられているドゥフシャンタ王というのは、インドの『シャクンタラー』の登場人物である[1]。このように、注釈の中でインドのものと北欧のものを容易に並べるのは、やはりグリム兄弟の特徴である。

さて『シャクンタラー』は、最も有名なインドの詩人と称されるカーリダーサによる戯曲作品 (全7幕) である。彼の生涯に関しては詳しいことは分かっていないが、4世紀後半から5世紀前半頃の人と言われている。『シャクンタラー』は、1789年にウィリアム・ジョーンズが英訳し、1791年にはドイツ、1803年にはフランスで翻訳され、好評を博したものであった[2]。以下、辻訳 (カーリダーサ 1981) に従って、簡単に内容を見ておく。

ドゥフシャンタ王は狩りの途中、カンヴァ仙人の養女のシャクンタラーに出会う。ふたりは互いに愛し合う仲となり、結ばれる。王は出立する際に、「思い出の品」として自分の名前が刻まれた指輪をシャクンタラーの指にはめる。恋で頭が一杯のシャクンタラーは、気の短いドゥルヴァーサス大仙人の怒りを買ってしまう。**この仙人が、王がシャクンタラーを忘れるようにという呪詛をかけるのである。**妊娠したシャクンタラーは王の迎えを待つがむなしい。意を決して王のもとに赴くが、否認される。そこで「思い出の品」の指輪を示そうとするが、それは紛失してしまっている。

後にこの指輪が見つかり、王は全てを思い出し、大団円となるのだが、グリム兄弟はこのようにシャクンタラーを忘れるところに注目し、ブリュンヒルドをはじめとし、昔話の中で忘れられるその他の女性たちと関連づけていたのである。

3. 『カター・サリット・サーガラ』

ソーマ・デーヴァ (Somadeva, 11 世紀) による『カター・サリット・サーガラ』は、18巻2万1388頃のサンスクリットの韻文から成り、枠物語の間に長短さまざまの350種の物語が織り込まれているものである。ソーマ・デーヴァが巻頭で述べているように、これは、グナーディヤ作による古代インドの大説話集『ブリハット・カター』(3-7 世紀の間)[3]を改作したものである。

グリム兄弟は、『昔話集 注釈篇』(第 3 巻) の巻末で、『カター・サリット・サーガラ』について次のように述べている。

> それらが民衆の口から直接取られたものでなく、既に一度ならず手が加えられていることが感じられる。そうでなければ、**ドイツの伝説や昔話との親縁関係はもっとはっきりと現れ出ていたことだろう。**しかしこの親縁関係は、出来事の状況や展開の仕方、また個々の筋や言い回しに見て取ることが出来る (Grimm 1994 Bd. 3 S. 412)。

---

[1] 『マハーバーラタ』の第 1 巻にも「シャクンタラー物語」がある。しかしそこでは、王はふたりが正式の夫婦ではなく、密かな関係を結んだため、不義の子だと言われるのを恐れて意図的に嘘をついている (山際 1991ff. 第一巻 S. 103)。よって王がシャクンタラーを忘れたわけではないため、グリム兄弟が意図しているのは、カーリダーサの話である。

[2] ゲーテは独訳を読んで賛辞を述べている。„Indische und Chinesische Dichtung“ など (Goethe 1998 Bd. 12 S. 300) に言及がある。

[3] 『ブリハット・カター』の原本は現存しないが、改作本が数種伝わっており、その中で最も有名なのが『カター・サリット・サーガラ』である。『ブリハット・カター』は、バッツァ国のウダヤナ王の結婚と王子ナラバーハナダッタの冒険物語を枠物語とする説話集だったらしい。

グリム兄弟はそうした親縁関係をふまえて、ソーマ・デーヴァの話、ジークフリートの伝承、「ふたりの兄弟」(KHM 060) という昔話の間に見出される類似点を指摘するのである。

> ジークフリートは、宝の分配を頼まれた時にニーベルングの刀を手に入れる。[...] ドイツの昔話においても (KHM 092, KHM 193, それから本巻の S. 327 参照)、苦しい立場に置かれた者、もしくは生命の危険に瀕している者が、争うふたりに出会い、同じような頼み事をされている。同様にソーマ・デーヴァでは、Putraka にも同じようなことが起きている。このインドの話の主人公は、幸運の子 (KHM 060) と同様に、目が覚めるたびに枕の下に金の塊を授けられている。これは、ジークフリートの宝や、常に増える腕輪であるアンドヴァリの腕輪に似ている。ふたりの運命はさらなる類似点を示している。Putraka は夜、見張られているパータリの城に飛んで行き、部屋に入り、娘を眠りから覚まし、結婚する。これもシグルズが最初にブリュンヒルドのもとに訪れるのと似ている。赤い布が Putraka の服の上に縫いこまれる。ジークフリートの場合が十字架であるように。妬みと悪意がインドの王の命を狙う。そして巡礼に行くようにそそのかされる。聖域の中で彼の殺害がしくまれる。ドイツの場合も似たような策略が行なわれ、狩に誘い出され、彼は泉のほとりで投げ槍に射ぬかれる[1] (Grimm 1994 Bd. 3 S. 412)。

グリム兄弟がまず指摘しているのは、ジークフリートが宝の分配を頼まれるのと同様に、『昔話集』の「金の山の王様」(KHM 092) と「太鼓たたき」(KHM 193) においても同様のことが語られていることである[2]。その後に取り上げられているソーマ・デーヴァの話とは、『カター・サリット・サーガラ』の「パータリプトラ[3]市の建設」のことである。これは、邦訳[4]には収録されていない話であるため、全体の要約をあげ、グリム兄弟の指摘に該当する箇所をゴシックで示す (以下は、Brockhaus 1975 からの要約である)。

> 婆羅門の 3 人の息子たちは、両親の死後クマーラを称えに南へ向かう途中、ある婆羅門の家に世話になる。その家の 3 人の娘と結婚するが、3 人の男が財産を使い果たしてしまったため、3 人の女は夫を見切り、世の中に出て行く。そのうちのひとりが妊娠していることが分かり、父親の知り合いの家に身を寄せる。そして男児が誕生し、

---

[1] Putraka の話に関する同様の指摘は、『神話学』第 2 版の序文でもなされている (J. Grimm 1992 Bd. 1 S. XXVI)。

[2] 「金の山の王様」(KHM 092) では、3 人の大男が財産の分配で争っている。皆の頭を落とす刀、姿を蝿に変えるマント、望む場所に運んでくれる靴、の 3 品である。「太鼓たたき」(KHM 193) では、ふたりの男が馬の鞍をめぐって争っている。それは望んだところに運んでくれる鞍であった。どちらの話においても、主人公の男がこれらの宝を獲得している。

[3] 古代インドの都市で、マガダ国の首都。

[4] 『カター・サリット・サーガラ』には、岩本訳 (ソーマ・デーヴァ 1974 年, 1989 年) がある。その他、泉訳『呪術の王国 憑鬼 25 話』(ソーマデーヴァ 1991 年) も同じくソーマ・デーヴァの作品である。

3 人の愛情が一身にそそがれる。

ある時、パールバティー[1]が、この女たちの姿を目にして同情を寄せる。そしてシヴァ神[2]に、あの男児がすぐに女たちを養えるようにしてあげるよう頼む。そこで、シヴァは 3 人の女たちに夢の中でこう告げる。「息子を Putraka と名づけなさい。**その子は目覚めると頭の下に多くの金を見つけるだろう。そしていつかは王になるだろう。**」**朝起きると、金があり、**女たちは喜ぶ。その金で財産を成し、Putraka はじきに王となる。

後に Putraka の父親ら 3 人は、Putraka のもとに身を寄せる。しかし 3 人はいつしか王座を望むようになり、**Putraka の暗殺を計画する。**そしてビンディヤ・バーシニー女神のところに巡礼に行くよう Putraka に勧め、そこに刺客を送っておく。暗殺は失敗するが、Putraka は、冷血な親戚のもとには戻ろうとせず、ビンディヤ山脈[3]にこもってしまう。

ある時、Putraka はふたりの男に出会う。**ふたりは、皿と棒と靴の所有権をめぐって争っている。**それらは、望んだ食べ物を出す皿、それを用いて描いたものを出す棒、履けば飛ぶことの出来る靴、という宝であった。**Putraka はふたりに駆け比べをさせ、離れたすきに宝を持って逃げる。**その後ある老婆のもとに身を寄せ、人知れず過す。老婆から、パータリ姫のことを聞いた Putraka は、恋心にとりつかれてしまう。そして夜、かの靴を用いて、姫のもとへ飛んでいく。窓から忍び込み、キスによって姫の目を覚まさせる。ふたりは愛し合うようになり、ガーンドハルヴァ婚[4]をする。しかし周囲に怪しまれるようになり、王が見張りをたてる。見張りの女は、**しるしとして Putraka の服に赤い布を縫い付ける。**それによって Putraka は発覚され、王の前に連行される。王の怒りを目にした Putraka は、靴を履き、姫を連れて逃げる。そして棒で描いて町を出し、その町の王となる。後に義父とも和解し、どちらの国をも治めるようになる。そうしてパータリプトラの町ができたのである (Brockhaus 1975 S. 8ff.)。

このように、ソーマ・デーヴァの話は、確かに「ふたりの兄弟」(KHM 060) との共通点を多く持つ。グリム兄弟による指摘を確認しておくと、「ふたりの兄弟」(KHM 060) では、金の鳥の心臓と肝臓を食べた双子が、毎朝枕の下に金貨を 1 枚ずつ発見するように、Putraka は、シヴァの計らいにより目覚めると頭の下に金を見つけるのである。これは、ジークフリートの宝[5]と、常に増えるアンドヴァリの腕輪[6]とも似ていることをグリム兄弟は明記し

---

[1] シヴァ神の妻。ヒマラヤの娘パールバティー (ウマー、ドゥルガー、ガウリーなどとも呼ばれる) は、苦行の末に彼の妻となった。

[2] ビシュヌやブラフマーと並ぶヒンドゥー教の主神。

[3] ビンディヤ山脈には、ドゥルガー女神が住んでいる。この神はまた、ビンディヤ・バーシニー (ビンディヤに住む女) とも呼ばれている。

[4] 「ガーンドハルヴァ婚とは、両親に告げることなく、相愛の男女の意思によって結婚すること。インドにある八種の結婚法のうちの一つで、王族にのみ許されている方法」である (ソーマデーヴァ 1991 S. 30 の注釈より)。

[5] ジークフリートの宝は、『ニーベルンゲンの歌』によれば「四昼夜かかって山から運んでくるほどの」(相良 1993 前編 S. 305) おびただしいものである。

[6] これは、「財産を増やすことのできる」腕輪で、ロキが小人のアンドヴァリから取り上げたも

ている。また、飛ぶことの出来る靴を用いてパータリ姫のもとに飛びゆく Putraka には、ブリュンヒルドのもとに行くシグルズを重ね合わせている。これは、眠りの茨に刺されて眠るブリュンヒルドを目覚めさせる場面であり、本論第II部冒頭で既に指摘したものである。そして Putraka の服の上に縫いこまれた赤い布は、ジークフリートの唯一の急所に絹糸で縫いつけられた十字の印 (相良 1993 前編 S. 248 参照) に、さらに巡礼先で殺害されそうになる Putraka は、狩の途中に泉で喉を潤しているところをハゲネによって槍で突き刺されるジークフリートが結び付けられたのである[1]。

注釈の記述に見られるように、これらの一致点を、グリム兄弟は「親縁関係」、すなわち共通の源に起因すると想定していたのである。

第3節　ペルシア

ペルシア語も、インド・ヨーロッパ語族、イラン語派の西部グループに属する言語である。グリム兄弟はやはりペルシアとのつながりに関してもしばしば言及をしている。

1. 『王書』

グリム『昔話集 注釈篇』の巻末には、古い伝承に見うけられる昔話の筋について次のような記述がある。

> とりわけ豊かなのはペルシアである。すでに、フェルドウスィーによる古い叙事詩の『王書 (シャー・ナーメ)』は、芸術性豊かに手が加えられているが、昔話の性質や色合いの多くをそれでもなお見て取ることが出来る (Grimm 1994 Bd. 3 S. 362)。

『王書』は、フェルドウスィー (934?-1025 年)[2]が 980 年頃からおよそ 30 年の年月をかけて 1010 年に完成させたもので、イラン最大の民族叙事詩と言われている。イラン建国から7世紀半ばのササーン朝滅亡までの4王朝50人の王者の治世の記録をペルシア語で記した叙事詩である。第I部では神話時代、第II部では英雄たちの活躍する伝説の時代、第III部では歴史時代 (ササーン朝歴代の王の統治) が語られている[3]。

この『王書』に関する指摘は、「ラプンツェル」(KHM 012) の注釈に見られる。そこにも「乙女の垂らした編み髪をつたって登る」場面があるというのである (Grimm 1994 Bd. 3 S. 34)。

まず「ラプンツェル」だが、ラプンツェルは魔女によって、上方に小さな窓がひとつあるきりの塔に閉じ込められている。この魔女は塔に入る際に、こう呼びかける。

のである。小人はその腕輪に呪いをかけている (『エッダ』「詩語法」, スノリ 1983 S. 46)。

[1] 翻訳では「騎士ジーフリトが泉の上にかがんで水を飲んでいると、ハゲネの狙った槍はあの十字の印をつらぬき、傷口からほとばしる心臓の血はしとどにハゲネの衣服をぬらした。かかる無残の所業をなした勇士は、その後絶えてなかったのだ」(相良 1993 前編 S. 267)。

[2] 本名はアブー・ル・カースィム。彼の生涯については知られていない。

[3] 黒柳訳 (フェルドゥスィー 1974)、岡田訳 (フェルドウスィー 1999) の解説より。

「ラプンツェル、ラプンツェル、
おまえの髪の毛を垂らしておくれ」

そして、ラプンツェルが垂らした髪の毛をつたって魔女は登っていくのだ。後には、ラプンツェルの歌声に魅せられた王子が、魔女の真似をして塔に登ることに成功し、ラプンツェルのもとに通うようになっている。そうした場面に結びつけられたのが、『王書』のザールとルーダーベの逢い引きの場面であった[1]。

ザールは、イランの勇者サームの息子だが、白髪頭で誕生したため、それを恥じた父親によって山に捨てられる。ところが霊鳥に育てられ、後にサームのもとに戻ることが出来る。ある時、ザールはルーダーベの噂を耳にし、恋の虜となってしまう。一方ルーダーベもザールの噂を聞き、恋に落ちる。しかしルーダーベの家系をイラン王が憎んでいたため、ふたりは密かに会う手立てをするのである。ルーダーベとザールが初めて出会う場面を見てみよう。

バルコニー (露台) に立つルーダーベの前にザールが現れ、こう話しかける。

> 「今あなたの甘美な声、やさしい言葉で私は幸福になりました。私たちが一緒になれる手立てを考えてください。なぜならばあなたは露台の上、私は路上に離ればなれにいるのですから」
>
> 妖精の美女は勇者のこの言葉をきくと、闇夜のような漆黒の髪をほどく。彼女は長いながい編み髪をほどくのだが、それは漆黒の麝香では編みあげることもできないような編み紐。彼女の襟もとに蛇のように輪をなして条々とつながる捲髪。この捲髪を彼女は露台の欄干のうえからたらす。ザールは心中につぶやく——非の打ちどころのない編み紐だ！
>
> ルーダーベが高みから声をかけた。
>
> 「さあ、勇者よ、勇士の子よ！さあ急いであなたの獅子の胸を広げ、その背をのばし王の手をさしのべてこの黒い捲髪の端をつかんでください。私があなたのための縄となるのです」(フェルドウスィー 1999 (岡田訳) S. 150)。

髪の毛をつたって登るという考え、そしてそれが逢い引きをするためだというところに類似点があるが、「ラプンツェル」(KHM 012) には『王書』に見られるような仰々しい言葉は用いられていない。

そして、ザールは実際には髪の毛を使うにしのびず、自ら投げた縄をつたって登るのだが、それはルーダーベの美しい髪をいたわる気持ちからである (Vgl. Lüthi 1966 S. 78)。このように登場人物が心配りをすることも、グリム兄弟に「芸術性豊かに手が加えられている」と言わしめたところでもあり、昔話で言うならば、創作昔話的な側面と言える。なぜなら、口承の民話では、登場人物は精神的な奥行きを持たず、平面的に描かれるため (Lüthi 1992 S. 13ff.)、相手の髪の毛が引っ張られて痛いだろうとは考えないからである。一方の

[1] 後に、ザールとルーダーベの間に生まれるロスタムの武勇伝が、『王書』の中で特に有名である。

グリムの王子は、ラプンツェルの髪をいたわることなく、無邪気に登ってゆく。しかしこうした創作昔話との比較は、第Ⅲ部で詳しく行うことにしたい。

2. 『七王妃物語』

中世イランの叙事詩人の第一人者と言われるニザーミー (1141-1209 年)[1]の『七王妃物語(ハフト・パイカル)』(1198 年)[2]に関しても、グリム兄弟は言及をしている。

ニザーミーが記した『ハムセ』(Khamsa) と呼ばれる五部作のうちの最高傑作とも言われるのが『七王妃物語』である。これはイスラム以前からの伝承をもとにしてニザーミーがまとめたものだという。『七王妃物語』は枠物語であり、枠になる物語の主人公はバハラーム・グールである。これは実在のバハラーム五世 (在位 420-438 年) がモデルとなっており、彼の生涯が描かれている。とはいえ全体の半分を占めているのは、彼の 7 人の妃が語る物語である。バハラームは、曜日毎に別の王妃を訪れ、その語りに耳を傾けるのだ。そこではバハラームは脇役に過ぎない。これは、『千一夜物語』のシャハリヤール王と同様である。

さて、グリム兄弟の『昔話集』の「ふたりの旅人」(KHM 107) に付けられた注釈には以下の指摘がある。

> ペルシアの詩人ニザーミーの『ハフト・パイカル』にも、見るからに**親縁関係のある**話がひとつある (Grimm 1994 Bd. 3 S. 201)。

グリム兄弟は、明確な場所を指示していないが、第 30 章で中国から迎えた妃が語る話を意図していることは、「ふたりの旅人」の内容との一致から明らかだ。

まずはグリム兄弟の「ふたりの旅人」(KHM 107) の内容を確認しておこう。

一緒に旅をすることになった仕立て屋と靴屋は、ある時森にさしかかる。森を抜けるふたつの道のうち、片方は 2 日、もう片方は 7 日かかる。楽天的な仕立て屋は 2 日分のパン、慎重な靴屋は 7 日分のパンを持って行く。しかしそれは長い方の道であることが分かる。5 日目に**靴屋は、片目と交換にパンを一切れ仕立て屋に与える。**7 日目には再び**残りの目と交換にパンを与える。**靴屋は、目の見えない仕立て屋を首吊り台に置き去りにして行ってしまう。しかし仕立て屋は、烏の話から、**首吊り台から垂れる露には目を見えるようにする力がある**ことを知り、再び目を得る。そして旅の途上、動物を捕まえるが、懇願を聞き入れて見逃してあげる。後に住み着いた町で、仕立て屋は徐々に評判をあげ、ついには王のおかかえの仕立て屋となる。例の靴屋も同じ日に王のおかかえとなる。そして仕立て屋の仕返しをを恐れて、靴屋は彼を陥れようとする。しかし仕立て屋は、助けた動物たちの助力を得て、難題をこなす。そして一番上の**王女と結婚する。**一方、追放された靴屋は、首吊り台のところで、烏に目をつつき出されてしまうのであった。

では、次にニザーミーの話を見てみたい。

ある時、ふたりの若者が他の町に向けて出立する。ひとりの名はハイル (善)、もうひと

---

[1] 本名はイルヤース。生没年には異説もある。19 世紀までイラン領だったガンジャで生まれ育った。

[2] 「ハフト・パイカル」というのは、「七人像」や「七つの肖像画」という意味であるが、黒柳は、内容を反映させて『七王妃物語』と訳している (ニザーミー 1980 S. 294)。

りはシャッル (悪) である。途上、ハイルは食料を食べ尽くし、水も飲み尽くしてしまう。シャッルの水は残っており、友に隠れて飲んでいる。ハイルはそれに気づいていたが我慢をしている。とうとう我慢の限界がくると、ふたつの宝石と交換に水を求める。しかしシャッルは冷たくこう言い放つ。

「わたしがその宝石をこっそり受け取っても
結局は取り返すのだろう
どんなことをしてもわたしから
取り戻せない宝石が欲しいのだ」
ハイルは「それはどんな宝石ですか
言って下さい、その手に渡しましょう」
シャッルは「**それはあなたの二つの目玉だ**
その方がこんな宝石より貴重だよ
水でその目玉を売ってくれ、そうでなければ
水を飲むのはあきらめなさい」(ニザーミー 1980 (黒柳訳) S. 204)。

そうして、シャッルはハイルの両目をえぐり出すだけでなく、衣服、荷物、宝石を奪い取り、水も与えずに立ち去るのであった。苦しむハイルのもとにクルド人の長の娘が通りかかる。彼女はハイルを助け、家に連れて帰る。父親は、**不思議な力を持つ木**が水のみ場に生えていることを知っている。その木は根元から二枝に分かれており、片方の枝の葉は「**盲いた目に光をもたらす**」、もう一方の枝の葉は「**生命の水と同じで癲癇持ちを救う**」のである。この葉の効能でハイルの目は治癒する。その後、かの娘と結婚して幸福になる。ある時旅をしていたハイルは、王の娘が癲癇だということを知る。それを治せば**王女と結婚することが出来る**が、治せない場合は首を刎ねられるという。ハイルは、王女と結婚出来るという条件は辞退しつつも、例の葉を使って王女を治す。しかし王女は、これまで約束に従って治せなかった者の首を刎ねてきたのだから、結婚の条件も果たさなければならないと考え、ハイルと結婚する。さらには、失明している宰相の娘がおり、ハイルは例の葉を用いて彼女も治し、その娘も妻にする。こうしてハイルは 3 人の妻と幸せに暮らす。そうするうちに、彼は商売をしているシャッルを見かける。ハイルはシャッルを殺そうとするが、許しを乞うシャッルの言葉を聞いて、釈放する。しかしクルドがその首を刎ねる (ニザーミー 1980 S. 209ff.)。

このように、ふたりの男が連れ立って旅に出、片方の食料が尽き、目と交換に食料／水を得ようとするところ、そして目が治癒するところ、最後に王女と結婚するところに確かに共通点が見うけられる。そのためグリム兄弟は、このふたつの話の間にも「親縁関係」(Grimm 1994 Bd. 3 S. 201) を見出していたのである。

第4節　インド・ヨーロッパ以外の伝承について

これまで考察してきたように、グリム兄弟は、インド・ヨーロッパ (ゲルマン) 地域のものには、共通の源があることを想定し、「親縁関係にある」(verwandt) という指摘をしているのだが、それ以外の地域の伝承についてはどのように考えていたのであろうか。それらに関しても、量としては多くはないが、やはり言及がなされているので、見ていきたい。

1. 『千一夜物語』

アラブ文学の古典である『千一夜物語』は、フランスのガランが1704年より翻訳したことで広く知られるようになった。彼の没後も翻訳の出版は続けられ、1717年に全12巻が完結し、以後ヨーロッパの各国語に翻訳された。

アラビア語は、インド・ヨーロッパ語族に属さないが、グリム兄弟はアラビアの昔話を次のように捉えている。

> アラビア人のものに、ドイツのものと親縁関係がある昔話があるならば、それらが『千一夜物語』に由来していることで説明がつく。つまり、『千一夜物語』がインド起源だからである (Grimm 1994 Bd. 3 S. 423)。

つまり、『千一夜物語』はそもそもインド起源のものであるため[1]、アラビアの昔話にドイツの昔話と類似点があるのも不思議はないとグリム兄弟は考えたのであった。そして『千一夜物語』も同一の源の延長線上で捉えていたのである。

ここでは「ジメリの山」(KHM 142) を見てみたい。これは、金持ちの兄と、貧乏な弟の話である。弟は、泥棒たちが「ゼムジ (Semsi) の山、ゼムジの山、開け！」と言って、山を開け、中に宝を隠すのを見る。そして泥棒が去った後に、金貨を持ち帰る。弟は兄から大きな枡を借りて、金を取ってくる際に使用していた。弟が突如金持ちになったことを妬ましく思った兄は、枡の底にタールを塗っておく。すると金貨が1枚付いたまま返却される。弟を問いただして、金の入手方法を知った兄は、真似をして山にいく。そして山を開け、宝を奪う。しかし帰る際になって、山の名前を忘れてしまい「ジメリ (Simeli) の山、ジメリの山、開け！」という間違った呪文を叫ぶが、むろん山は開かない。そこで12人の泥棒が帰って来て、兄は殺されてしまうのである。

これが、有名な「アリ・ババと四十人の盗賊の物語」によく似た話であることは、言うまでもないだろう。40人の盗賊が「胡麻よ、開け！」と言って岩を開け、財宝を隠すのを見たアリ・ババが、金貨を持ち帰る話である。そして真似をした兄のカシムが、呪文を忘

---

[1] ササーン朝時代にパフラビー語で書かれた『千物語 (ハザール・アフサーナ)』は**インド説話の影響の強い**ものだった。8世紀後半頃に、バグダードでアラビア語に訳され『アルフ・フラーファート (千物語)』と呼ばれた。やがてイスラム思想に染め上げられて『アルフ・ライラ (千物語)』と呼ばれるようになった。12世紀頃に『アルフ・ライラ・ワ・ライラ (千夜一夜)』という名となったらしい。初めはバグダードを中心に多くの物語を取り入れ、1258年以降にカイロでさらに多くの物語を加えた。1517年にマムルーク朝が滅亡した頃は現在の形を整えていたものと推察されている (平凡社 『世界大百科事典』 第18巻)。

れてしまい、外に出ることができなくなり、盗賊に六つ裂きにされ殺されている (豊島 1999 第十一巻 S. 196ff.)。

『千一夜物語』ではその後、盗賊はもうひとりの存在に感づき、探し出して殺そうとするのだが、アリ・ババの家の女奴隷のマルジャーナの機転で助かる。そして逆に盗賊たちが始末されることになる。グリムの「ジメリの山」(KHM 142) には、この後半部はなく、兄が殺されたところで話が終わっている。

グリム兄弟は「ジメリの山」の注釈に次のように記している。

> ミュンスター地方で語られたこの話は、注目すべきことに、ハルツでも Dummburg (Otmar S. 235, 238[1])、または Hochburg の話として出てくる。そして**オリエントの 40 人の盗賊の物語とぴたりと一致している**のである (Grimm 1994 Bd. 3 S. 237)。

グリム兄弟は、自分たちが入手した昔話が『千一夜物語』に直接由来するものだとは考えていない。なぜなら、こうした山の名前が古いドイツの文献にも見出されるからである。例えばピストリウスのフルダの古文書[2]において、グラープフェルトにある山の一つが Similes という名となっているだけでなく、スイスの歌にも Simeliberg が出てくることをグリム兄弟はこの昔話の注釈の中でその根拠として挙げている (Grimm 1994 Bd. 3 S. 237)。

ただし、ボルテ／ポリフカが指摘しているように、そもそも Semeli/Simeli という名は、Semsi という本当の名を思い出せなくて言うものであり[3]、この昔話がドイツ起源であることの証拠としては弱く (Bolte/Polívka 1963 Bd. 3 S. 138)、「ジメリの山」がドイツの土着の話であることは非常に疑わしい。

しかしグリム自身はこの昔話がドイツのものであり、両者に一致点があるのは、インドを介して、共通の源に属しているからだと考え、この昔話を『昔話集』に掲載したのだ。

2. その他

これまでの考察から、グリム兄弟は、インド・ヨーロッパの範囲内で各地の (昔) 話に類似点が見出された場合には、それは想定される共通の源によるためだと考えていたことが分かる。その他インド・ヨーロッパ以外の地域に存在する類似のものについては、次のように考えていたのである。

> 時間的にも空間的にも離れている民族の昔話が、隣接した民族の昔話に劣らず一致をみせるのは、一部は、それら昔話の根底にある着想 (Idee) と、特徴的な描写に起因している。また一部には出来事の独特な組合せ方と解決法にも基づいている。おのずから思いつかれる考えがあるように、単純で自然なためどこででも繰り返される出来事がある。だから様々な国で同一の、あるいは非常によく似た昔話が、互いに何の

---

[1] Otmar: Volks-Sagen 1800 S. 225 (Bolte/Polívka 1963 Bd. 3 S. 138)。

[2] ボルテ／ポリフカの注釈によれば、Fuldaer Urkunde um 867 bei Pistorius, Rerum Germanicarum veteres scriptores es. Struvius 1726 3, 632 である (Bolte/Polívka 1963 Bd. 3 S. 138)。

[3] そもそもこの昔話の題名は、本当の呪文にちなんだ ***Semsi***berg (ゼムジの山) ではなく、思い出せなくて言う呪文にちなんだ ***Simeli***berg (ジメリの山) なのである。

関係を持つこともなく発生することが出来た。**親縁関係のない言語間**においても、自然の音を模倣した (模倣して作った) ために、ほとんど差異のない言葉を、もしくは全く同一の言葉を生み出すことがあるのと同様である (Grimm 1994 Bd. 3 S. 417)。

つまりグリム兄弟は、基本的にはそれが伝播によって伝わったとは考えずに[1]、同じ気候条件の下では同じ植物が生まれるように、同じ精神的状況下で同じような話が多元的に発生したとみたのである。そのためこの考え方は、後に多元的発生説として提唱されるようになる考え方を先取りしていると言うことも出来る (Vgl. Leyen 1958 S. 19)。

そのため『昔話集 注釈篇』の言及は、インド・ヨーロッパ圏外のものをも含んでいるのである。一例を挙げるならば、西アフリカのシエラレオネで諸言語を調べ、伝承を集めたケーレの本[2]より、人間が登場する 5 つの昔話と動物の 12 の話を選び、詳しく筋を紹介し、どういったところにドイツの昔話との類似点があるかを示している (Grimm 1994 Bd. 3 S. 373ff.)。

補足　グリムの神話観とその後の研究

インド・ヨーロッパという枠で共通の言語の源が想定されるように、昔話にも同様の範囲で共通の源が想定出来るというグリム兄弟の考察を、極端な形で押し進めたのがオックスフォード大学のサンスクリット語の専門家ミュラー (Max Müller) であった。1856 年の論文で彼は、昔話は、インド・ヨーロッパの太陽神話が頽落したものだと主張した。こうして一時期、昔話の全てのものを神話のアレゴリーと考えることも流行した。しかしこれは特殊な解釈に走ったため、今日では研究史的な関心からしか言及されなくなっている。

一方 1859 年に、ベンファイ (Theodor Benfey) が古代インドの説話集『パンチャタントラ』をドイツ語に翻訳した[3]。そして、動物寓話の故郷は例外的にギリシア[4]だが、ヨーロッパのほとんどの昔話は、インドから文献や口承によって伝わったと主張したのである。つまり、昔話の起源はグリム兄弟が言うような神話ではなく、インド起源の教訓の話というのだ (Leyen 1958 S. 20)。しかし古代エジプトや古代ギリシアで昔話の痕跡が発見されるとともに、この説はゆらぎ始め、多元発生説が主流となっていくのであった (Lüthi 1996 S. 69)。

また、人類学者ラング (Andrew Lang) らの研究をもとにして、フランスのベディエ (Joseph Bédier) が『ファブリオ論』(1893 年) で昔話の多元的発生を唱えた。彼はグリム兄弟とは逆に、昔話の方が語りの形式としては古く、昔話が神話よりも先に存在しており、そこから (史実が加わるなどして) 伝説 (もしくは神話) が成立したと考えた。ドイツでは

---

[1] むろん、グリムも伝播が絶対に起りえないと考えていた訳ではない。「私は、昔話がある民族から他の民族へと伝播し、そこに根付くという可能性も否定しない」(Grimm 1994 Bd. 3 S. 418)。

[2] Koelle, Sigismund Wilhelm: African native literature or proverbs, tales, fables and historical fragments in the Kanuri or Bornu language. to which are added a translation of the above and a Kanuri-English vocabulary. London 1854.

[3] Theodor Benfey: Pantschatantra. Fünf Bücher indischer Fabeln, Märchen und Erzählungen. 2 Bde. 1859.

[4] 動物寓話は既にイソップの寓話にあり、それはインドのものより古いためである。

ナウマンらがそれを受け継いだ (Lüthi 1996 S. 63, Bolte/Polívka 1963 Bd. 4 S. 166)。

このように 19 世紀には、昔話の起源や、神話と昔話の古さについての議論が盛んに行われていたが、20 世紀に入ってそれは下火となっていった。そして結局のところ、昔話の起源については未だにこれといった決定的な説はなく、暗闇の中なのである (Lüthi 1966 S. 151, Vries 1967 S. 70)。また、神話が先か、昔話が先かという議論も、神話と昔話の区別がつくことが前提になっているが、その区別さえも議論が分かれている[1]。そうした背景のもと、20 世紀ともなると、昔話研究の関心は変遷し、共同体での語りの役割などに向けられるようになったのであった (西口 1994 S. 20)。

それでもなお、アールネ・トンプソンの『昔話の型』[2]や『昔話百科事典』(EM) をはじめ、トンプソンの『モチーフ・インデックス』[3]などにおいて、神話関係に数多くの項が割かれていることからも分かるように、昔話と神話には、確かに同じモチーフが頻出している。だからといって、それだけでは親縁関係や借用の証明とはならないため (Röhrich 1984 S. 21)、今日の語りの研究 (Erzählforschung) では、グリム兄弟が想定していたようなゲルマン神話の残滓が昔話の中に残っているということには根拠はない、と見なされている (Kellner 1994 S. 5)。

しかしグリム兄弟の「昔話—神話観」が学問的に受け入れられるものか否かということは別にしても、グリム兄弟が昔話の中に「神話」を見出していたことは、彼らの『昔話集』の編纂に少なからず影響を与えているのは確かである。とりわけ、本論第 I 部第 3 章で指摘したような、時代の要求とは相容れないものでありながら、書きかえられていないものは、グリム兄弟の「昔話—神話観」に照らしてみることで、グリム兄弟がそれらを意識的に残していることが理解されるのである。そのことを、次章では見ていくことになる。

---

[1] この議論は野村 1997 S. 258ff.に詳しい。

[2] Antti Aarne and Stith Thompson: The Types of the Folklore. Helsinki 1961. 昔話を 2300 あまりのタイプに分け、紹介したもの。

[3] Stith Thompson: Motiv-Index of Folkliteratur. 1955ff. 昔話、寓話、聖者伝などからモチーフを取り出し、紹介したもの。全 6 巻。第 1 巻のAの項が「神話的モチーフ」である。これには第 1 巻の半分以上が割かれている。